

第三節 手塚の皇子塚

手塚の皇子塚には、新町の王子塚と同じような民話が残されています。

今から千三百年も前のことです。氷上塩焼王という年若い王子が、多くの家来にそそのかされて、時の朝廷に背いて兵を起しました。このため都の多くの家や建物が焼かれ、尊い人命も数多く失われました。王子はとても魔術がうまくて、それを使って戦いましたが、悪いことはできません。ついに捕えられ、伊豆の小島に流されてしまいました。

そして四年が過ぎ許されて都へ上りましたが、朝廷に別扱いされるのを面白くなく、再び背いて、今度は信濃国塩田庄に流されてしまいました。

塩焼王はこのあたりに居館を造り、勢力を伸ばし信濃の王様のようなふるまいをしていました。これが都に知れ、塩焼王を亡くそうと、数千騎の兵で攻め入り、塩焼王はついに討ち滅ぼされてしまいました。魔術師塩焼王の怨霊がたたってはと、遺体を四つ裂きにして、両手をこの塚に埋めました。それからはこの地名を「手塚」と呼ぶようになりました。

また、頭と足は諏訪の地に、胴は筑摩の地に葬ったそうです。

塚も朽ちましたので、明治二年（一八六九）さらに手塚の無量寺へ預けられました。そして昭和五十五年（一九八〇）に無量寺境内にお堂が造られ、ここでゆっくり安らいでおられます。

この地蔵尊は、雨乞いに度々かり出されます。干ばつになると村びとは榛名山頂に担ぎあげ、朝から晩まで「雨降らせたんまいな、南無地蔵大菩薩」と、かねを打ち鳴らし、交替でお祈りを続けます。雨が降るまで悲壮です。かねを鳴らし続ける村びとと、かねを鳴らされる地蔵さまの根気比べとでもいみましょうか。結局地蔵さまが村びとの熱意に負けて、雨を降らせてくださる慈悲深い地蔵さまでもあります。

第五節 手塚太郎金刺光盛の

駒の足形橋

手塚村は、むかし信濃国塩田庄、手塚の里といいました。この里に、手塚太郎金刺光盛という立派な武将がおりました。信濃が生んだ猛将・朝日將軍木曾義仲が、依田（上田市丸子町依田）で兵をあげてからは、この手塚の里にあって、義仲軍の西方の守備にあたっていました。

安徳天皇の寿永二年（一一八三）春のこと、義仲が越後の国

第四節 元木の地蔵さま

むかしむかし、沢山の元木沢に、とても大きな柳の木が立っていました。弘法大師は巡国のとき、この巨木をみて、「これは素晴らしい霊木だ」と驚き、この巨木を切って自ら二つの仏像をつくりました。巨木の根元の方で「地蔵尊像」を、末の方で「薬師如来」を刻みました。そしてその沢の岩山のほら穴に静かに安置しておきました。これが有名な手塚の「元木の地蔵」と、中野の「末木の薬師」であります。

この元木の地蔵尊は、延命地蔵菩薩で、雨乞いにも大変な御利益があり、村民に厚く敬われました。何といっても険しい岩山ですので、誰もそこまでは登らず、その沢口で拝んでいました。この霊地を「元木沢」、沢口を「元木口」と名づけられました。

手塚太郎金刺光盛は、このご利益の尊像を手塚氏の守本尊とし、手塚の里堰口に、応慈山光盛寺を建て、岩山からこの寺に移しました。そして光盛は木曾義仲に従って京へ上ったのです。

やがて主のない光盛寺は廃寺となり、地蔵尊は東紺屋村の見晴らしの地（西塩田小学校開校の地）にお堂を建て、安置しました。はじめは堂守を置き手厚く管理をしておりましたが、お

光盛も海野・根津・円子等郷土の諸将とともに、手兵数十騎を従えてこれに加わりました。

出陣の朝、光盛は早々と起き、家族・乳母更料らと別れの盃をかわしました。馬にまたがった光盛は、手兵らとともに館前で武運長久を祈りました。空は青く、抜けるような爽やかな朝でした。軍神に祈願をしたそのときです。「めりめり」と音がして、館前に架けてあった石橋に、絵に書いたような「ひずめ跡」が、ぼっくりと浮き出たではありませんか。光盛はじめ皆のものども、「これは武運長久・幸運の兆しであろう」と、大変喜びました。

この橋の長さは、四尺余（一、三m）・幅三尺（一m）で、明治初年には、山田と手塚境の農道に一個、手塚堰口の「三ノ堰」の橋に一個使われていましたが、その後残念なことに、山田・手塚境の農道に架けられていたものは行方不明になってしまいました。

堰口にあったものは、三ノ堰の改修に伴い、水路の幅が広くなり架けられなくなったため、その道端の空地にうち置かれたままになっていました。

時は流れ、平成二十一年（二〇〇九）十月十五日付で、手塚誌編集委員会から手塚自治会長へ駒の足形橋の移転保存の要望書が出されました。これを受け手塚自治会は、平成二十二年三月十九日、「舌喰池周辺整備実行委員会」のメンバーにより、